

特集

古今エジプトの イメージ

世界にひろがる古代エジプトのイメージ 末森 薫

ふたたび露出する

エジプトの歴史的イメージ イブラヒム・モハメッド・アリ

レタリーアリテイー書かれた記号の芸術― イザベラ・ウフマン

文化とのつきあい方 相島 葉月





エジプト発掘六〇年

よしむら さくし
吉村 作治

エジプトの古都ルクソールにある王家の谷でツタンカーメン王墓が発見されたのは、一九三二年一月四日のことだった。今年はもちろん二〇〇周年、さらに象形文字がフランス人のシャンポリオンによって解読されたのが、さらに二〇〇年前の一八三二年なので、本年はエジプト考古学にとって記念すべき年のようである。

古代エジプト文明というと日本人の多くはピラミッド、ツタンカーメン、クレオパトラというイメージを持っているかもしれない。古代七不思議で唯一現存している大ピラミッドや、黄金のマスクで有名なツタンカーメン王、そして絶世の美女で悲劇のヒロイン、クレオパトラ女王と魅力的なキーワードがたくさんある。旅行会社の調べによると、エジプトは一生に一度は行ってみたい国の上位らしい。エジ

プトに興味を持ってくれている日本人が多いのは嬉しいことである。

私がエジプト考古学者になろうと思ったきっかけは小学校四年生の時、図書室で読んだ『ツタンカーメン王のひみつ』（講談社）というイギリス人考古学者ハワード・カーターの発掘記だった。胸躍る冒険譚に私は虜（まぼろし）になって、第二のカーターになろうと思ったのである。

エジプトと日本は地球の裏側に位置している。時代的にはピラミッド建設の紀元前三〇〇〇年頃、日本は縄文時代である。しかし日本にとって距離的にも時間的にも遠い国に思えるエジプトは、意外にもつながっている。シルクロードを通じて、文化や思想、宗教などさまざまなものがエジプトから日本に伝わってきてきているのである。

一九六六年、念願が叶って学生五名の調査隊は初めてエジプトの地を踏んだ。それから私は発掘権を取るために奔走した。その時、いつもエジプト考古庁のお役人に言われたのが「日本？ エジプトとは何のかわかりもないアジアの国が発掘ですか？」という言葉だった。そこで私は「いえいえ、そんなことはありません。」と言ってこつ続けたのだ。

古代エジプトの有名なローゼット紋はハスの花紋ですが、これは日本国皇室の菊の御紋のルーツなんです、そう言って日本のパスポートの表紙を見せると、相手はびつくりする。さらにスフィンクスは日本の狛犬（こまぬ）のルーツで、お彼岸の墓参りの思想も古代エジプトから伝わった習わしなんです、と。このように数え上げたらきりがありません、日本にもたらされたものがあるのです。そんな両国の縁（よこ）が功を奏してか、私たちはアジアで最初のエジプトでの発掘権を頂いた。私が一〇歳の時に夢見た日本におけるエジプト考古学のスタートだった。それから半世紀、まだ私の発掘人生は続いている。

目次

- 1 エッセイ 千字文
エジプト発掘60年
吉村 作治

特集 古今エジプトのイメージ

- 2 世界にひろがる
古代エジプトのイメージ
末森 薫
- 4 ふたたび露出する
エジプトの歴史的イメージ
イブラヒム・モハメッド・アリ
- 6 レターリアリティ
一書かれた記号の芸術—
イザベラ・ウフマン
- 8 文化とのつきあい方
相島 葉月
- 10 みんぱく回遊
災いと闘う守護者
菅瀬 晶子
- 12 みんぱくインフォメーション
- 14 ○○してみました世界のフィールド
南米熱帯サバンナ2泊3日の旅
齋藤 晃
- 16 コレクションあれこれ
日系企業パンノーの足跡
丹羽 典生
- 18 シネ倶楽部 M
笑いとして描かれる戦争
—「はみ出し者たち」
黒田 賢治
- 20 ことばの迷い道
伊勢大神楽の符牒
神野 知恵
- 21 編集後記・次号の予告

表紙
イザベラ・ウフマン《二つの書物、一つの教訓》2018年
© Izabela Uchman

左は福音書よりコプト語で「隣人を自分のように愛しなさい」。右は預言者ムハンマドの言行録（ハディース）よりアラビア語で「自分自身に望むことを兄弟のために願うようになるまでは、真の信仰には達していない」

プロフィール

1943年東京都生まれ。エジプト考古学者。東日本国際大学総長、早稲田大学名誉教授（工学博士）。1966年にエジプトに赴いて以来、太陽の船、未盗掘の墓など数々の発見により世界的ニュースとなり日本にエジプト考古学を確立。大学で教える傍ら、講演、執筆活動等をおこない、Twitter等SNSでも情報発信中。公式ホームページ「吉村作治のエジプトピア」<https://www.egypt.co.jp/>

特集

古今エジプトのイメージ

エジプトのイメージを問われると、古代エジプトの考古資料や遺跡を思い起こす人は多いだろう。そのイメージは、どこから生まれ、どこに向かおうとしているのか。本特集では、古代から現代にまたがるエジプトのイメージの一端にふれたい。



ギザのピラミッドに臨む大エジプト博物館と、前庭広場に立つラムセス2世のオベリスク(エジプト、ギザ、2022年)

世界にひろがる 古代エジプトのイメージ

末森 薫 すえもり かおる
民博人類基礎理論研究部

世界に散らばるコレクション

今年、日本で開催された古代エジプトをテーマとするふたつの展覧会を訪れた。ひとつは大英博物館、もうひとつはライデン国立古代博物館の所蔵品で構成されたものであった。CTなどの先端技術を用いたミイラの研究成果など、古代エジプトのあらたな一面を知った。ミュージアムショップでは、人気のキャラクターとファラオや神々がコラボレーションしたグッズなど、古代エジプトのイメージから生み出されたたくさんの商品が並んでいた。

世界を見回すと、欧米を中心に古代エジプトのコレクションを所蔵する博物館や美術館がまたある。大英博物館の一〇万点以上、ルーブル美術館の七万七四〇四点、ボストン美術館の約四万五〇〇〇点をはじめ、一〇〇〇点以上のコレクションを所蔵する館は五〇を超える。そのなかには「エジプト」を冠するものも複数ある。ベルリンのエジプト博物館(別名、新博物館。所蔵数約八万点)、ロンドンのピートリーエジプト考古学博物館(所蔵数約八万点)、

トリノのエジプト博物館(所蔵数三万二五〇〇点)などが有名だ。オベリスクのような建物には収まらない大型のモニュメントも、パリやローマ、ニューヨークなど世界各地にある。エジプトに現存するオベリスクは、国外に運び出された数に遠くおよばない(断片は除く)。

ふくらんだイメージ

世界に散らばる古代エジプトの資料の多くは一九世紀から二〇世紀前半にかけてもたらされた。古代エジプトとの歴史的な繋がりのある西欧では、一七九八〜一八〇一年におこなわれたナポレオンのエジプト遠征をきっかけとして、古代エジプトブームがわきおこった。身近になったエジプトに駐在する役人や、探検・旅行に出かける人が増え、古代エジプトへの関心は高まっていった。遠征で発見されたロゼッタストーンは古代エジプトの文字(ヒエログリフ)を解読する手がかりとなり、西欧で近代エジプト学が生まれた。古代エジプトに魅了された人びとは考古資料を蒐集し、自国に持ち帰った。また、外交のために贈与されたり、富裕層の人びとの欲求を満たす

ために利用されることもあった。それらが今、エジプトの外で展示・収蔵・研究され、世界各地で古代エジプトのイメージをふくらませている。エジプトにつくられた西欧の博物館

国外に多くの考古資料が流出する事態は、それを禁じる条例の発布や資料を収蔵する施設の設置を促した。その流れは、一八九七年に着工し、一九〇一年に竣工したエジプト考古学博物館の建設へと帰結する。はじめて「博物館」として建てられた建物には、西欧の思想がふんだんに盛り込



エジプト考古学博物館のファサード(エジプト、カイロ、2017年)



エッフェル塔と並ぶコンコルド広場のオベリスク。クレオパトラの針とよばれている(フランス、パリ、2012年)



観覧者であふれる大英博物館のロゼッタストーン前(イギリス、ロンドン、2012年)



大エジプト博物館の入口。3つの言語が記されている(エジプト、ギザ、2022年)

エジプト主導のあらたなイメージ

一九二二年二月四日、イギリス人考古学者ハ

ワード・カーターはルクソールの王家の谷でツタンカーメン王墓を発見した。それから一〇〇年となる今年、ギザのピラミッドの近くで世界最大規模の考古学博物館、大エジプト博物館の開館準備が進められている。新しい博物館には、ツタンカーメン王墓から発見された五〇〇〇点におよぶ発掘品が一堂に集められるほか、ギザのピラミッドの側から発掘された二艘の太陽の船などが展示される。また、博物館に併設する保存修復センターでは、国外から返還された木棺の修復なども進められている。

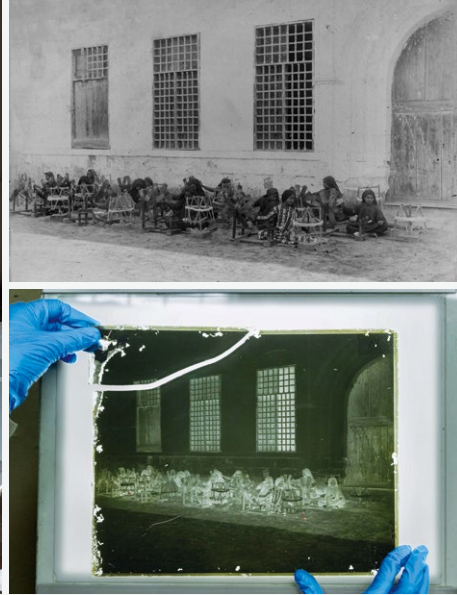
博物館の入口には、英語の呼称に被さるようになら、アラビア語の呼称が刻まれている(支援をおこなう日本の文字も記されている)。古代エジプトのあらたな研究拠点となる博物館において、エジプト主導によるあらたなイメージが生み出されていくことを予感させる。

ふたたび露出する

エジプトの歴史的イメージ

イブラヒム・モハメッド・アリ

ニューヨーク大学アブダビ校アラブ芸術研究センターアシスタント・アーキビスト
エジプト観光・考古省保存修復専門家 / 東京藝術大学博士後期課程



破損したガラス乾板の保存処置 (撮影:イブラヒム・モハメッド・アリ, 2018年)

写真技術とエジプト

見ている世界を二次元のイメージとして記録する写真の技術は、歴史的にエジプトと深いつながりがある。一世紀、「近代光学の父」とよばれるアラブの科学者ハサン・イブン・アル・ハイサム(九六五〜一〇四〇年)は、カイロ滞在中に光を用いた実験をおこない、のちに撮影に応用されることになる暗室の原理を発見した。数世紀を経た一八三九年、フランスの天文学者フランソワ・アラゴ(一七八六〜一八五三年)は、暗室の原理を応用したダゲレオタイプと命名される新しい写真技術を発表した。アラゴは写真の実用例として古代エジプトを取り上げ、遺跡に刻まれた膨大なヒエログリフの記録が容易になることを言及した。この提案は、現在の研究においても大いに活用されている。

ダゲレオタイプが発表された直後、フランスの眼鏡技師ノエル・マリー・ペイマル・レブール(一八〇七〜七三年)の依頼を受けたフレデリック・グーピル・フェスケ(一八二七〜七八年)とオラー

ス・ヴェルネ(一七八九〜一八六三年)は、エジプトの古代遺跡を撮影した。エジプトを記録したはじめての写真の数枚は翌年出版されたが、原板は失われている。一八四〇年代前半には、ジロ・ド・プランゲイ(一八〇四〜九二年)とジュール・イティエ(一八〇二〜七七年)のふたりのアマチュア写真家がエジプトを訪問し、古代遺跡やイスラム建築を撮影した。原板が現存する両者の写真は、一九世紀前半のエジプトの様子を伝える貴重な資料として保管されている。

エジプトにおける写真の流行

一九世紀後半にはヨーロッパ諸国の他、アメリカ、オスマン帝国などから多くの写真家がエジプトを訪れた。一八六〇年代にはヨーロッパからの旅行者が増加し、同じネガから大量の写真が複製された。写真が流行したエジプトでは、定住した写真家がスタジオを開き、古代遺跡や日常の風景を撮影して、お土産用のアルバムに収めた。また、発掘や博物館資料の記録に写真が活躍した。フランスのエジプト考古学者、オギュスト・マリエット(一八二二〜八一年)は、カイロにスタジオを構えるふたりの写真家と協力して、エジプトで最初の博物館であるブーラーク博物館の収蔵品を撮影し、図録を出版した。ブーラーク博物館はナイル川の氾濫により間もなく移転することとなったため、当時の様子を残す貴重な資料となっている。また、一九〇二年に開館したエジプト考古学博物館の館長となったガストン・マスベロ(一八四六〜一九一六年)は、四〇年以上

にわたって古代遺跡を撮影した写真家アントニオ・ベアト(一八三五〜一九〇六年)の写真やアイブを定期的に購入した。一八六三年、横浜港を閉鎖することを欧米各国に求めるためにフランスに向かった日本使節団三四名は、その道中でエジプトに立ち寄った。その際、スフィンクスの前で使節団にカメラを向けたのがベアトであった。

エジプトにおける写真の保存

一九世紀から二〇世紀半ばにかけてエジプトで撮影された写真コレクションは、国内外の公的・私的機関で保管されている。国内の保管場所のひとつがエジプト考古学博物館である。一九世紀半ばから二〇世紀半ばに撮影された膨大なガラス乾板には、博物館の収蔵品や、ルクソールなどエジプト各地の考古遺跡が写されている。

二〇一七年から二〇一八年にかけて、エジプト観光・考古省と大英博物館は、ガラス乾板コレクションのデジタル化と原板保存の事業を進めた。その成果を公開したエジプト考古学博物館の企画展では、学芸員と協力して、ガラス乾板の背面から光を当てるデザインや、ガラス乾板の保存に関する解説に取り組んだ。遺物を中心に構成される常設展とは異なる視点からエジプトをとらえた展示は、来館者たちにとって新鮮なものであり、エジプトのあらたな一面を提示した。

過去に撮影された写真には、現在は確認できないものが多く写されている。例えば、古代遺跡のなかには、その姿が完全に失われたものも少なくない。しかし、エジプトにおいて、写真の保存に携わる専門家は少ない。文化遺産保存研究の拠点であるカイロ大学においても、写真保存の教育ははじまったばかりである。スマート



ダゲレオタイプで撮影されたギザのピラミッド (撮影:フレデリック・グーピル・フェスケ&オラー・ヴェルネ, 1839年, フランス国立図書館蔵)



ダゲレオタイプで撮影されたルクソールのラムセウム (撮影:ジロ・デ・プランゲイ, 1844年, メトロポリタン美術館蔵)



スフィンクス前でベアトが撮影した幕末遣欧使節団 (撮影:アントニオ・ベアト, 1864年, 国立国会図書館蔵, 出典:国立国会図書館ウェブサイト)



エジプト考古学博物館に展示されているラーヘテブとネフェレトの像 (撮影:イブラヒム・モハメッド・アリ, 2018年)



ラーヘテブとネフェレトの像を撮影したガラス乾板と印刷物 (撮影:イブラヒム・モハメッド・アリ, 2018年)

フォンの普及によって誰しもが瞬時にたくさんの写真を撮れるようになり、自由にイメージをアレンジできる現在であるからこそ、過去の光が作り出したイメージを未来につないでいくことが求められている。 (翻訳・末森薫)

レターリアリティ —書かれた記号の芸術—

文字で描く現実

手で文字を書く行為は、人類の偉業のひとつとみなされてきた。しかし、今日その価値は忘れられ、電子化された文字に容赦なく取って



イザベラ・ウフマン《マト》2021年 © Izabela Uchman
真実、正義、秩序を擬人化した古代エジプトの女神

イザベラ・ウフマン アーティスト/保存修復家

代わられている。書は文化のアイデンティティを規定する。(古代語の)書かれた記号の独特な形と、縦と横への筆使いのリズムは、音と意味を伝える特徴的な視覚的構造を作り出す。

知的な発想と美的な形とのあいだの魅力的なつながりは、表音文字や表語文字のアーティとしての可能性を探求することをわたしに促した。わたしは、特定の文章を書きよって視覚的にユニークな図形に変換する文学的絵画を創り出し、LETTERALITYと名付けた。レター(文字)リアリティ(現実)の目的は、文字の形と単語の意味が調和して共存するような、視覚的現実を創り出すことである。作品の制作過程は記号と思想の対話である。

エジプトとの出会い

芸術的な資質と精神的な手法を組み合わせる事ができるため、あえてアラビア文字を自分の作品のおもな要素として選んだ。やがて、古代エジプト美術への情熱から、ヒエログリフを取り入れ、自分の芸術的スタイルに幅をもたせた。歴史と多様な文化をもつエジプトは、わたしのホームであり、インスピレーションの源となった。エジプトとの出会いは二五年前に遡る。カイロに住んでいた友人を訪ねたとき、古代エジプト美術とイスラーム建築に魅了された。当時、わたしはポーランドのワルシャワ美術アカデミーで保存修復学を専攻していたことから、ルクソールのハトシェプスト神殿におけるポーランド・エジプト考古学および保存修復ミッションに加入した。

その後一〇年間は修復家として遺跡の保存修復に従事し、最終的には主任修復家を務めた。王家の谷、ギザ、サッカラといった他の遺跡の保全にも携わっている。このような古代美術との密接なかわりから、わたしは文字の芸術的価値に強い関心をもつようになった。

エジプトにおける遺跡の保存修復の業務と並行して、わたしはワルシャワ大学東洋学研究所で古代語を学び、シリア人のアラビア語家庭教師についた。この先生こそが、わたしのアラビア文字を書く特別な才能に気づいた最初の人物で、アラビア書道を学ぶことを勧めてくれた。

多文化共生とアート

わたしは二〇一〇年よりカイロを拠点として異なる文化的背景の人びとと共に生き、創作活動をおこなっている。この巨大な都市にはさまざまな文化を代表する多様な出自の人びとが暮らす。異文化との対話は、古い問いに対する新しい答えを探すわたしに、ひらめきを与えてくれる。誰もが常に「他者」と向き合っている。アートは他者と向き合うことでクリエイティブな交流を可能にする、安全で刺激的な空間をもたらしてくれる。

わたしはアートをとおして、個人と文化遺産の関係を探っている。文化遺産には、異質な世界観のなかに感じる魅力的な多様性だけでなく、全人類の普遍的な知識や経験も含まれている。わたしの作品は、ナギーブ・マフフーズ(エジプト人ノーベル賞作家)やルーミー(スーフィー詩人)といった、時代や文化の差異を越えて共感を呼ぶ著名人のことばに視覚的解釈を付与した

古代エジプト美術の継承

古代エジプト美術において絵はテクストの一部で、一緒に書かれた文とともに一つのメッセージを伝えると考えられている。書と絵画が、言語的に密接な関係にある古代エジプト美術は、わたしの大切な道標となった。世界で二番目に古い書きことばとされる古代エジプト語は、意味を保有する文法的構造をもつ表語文字

の視覚的にユニークな美しさでわたしを魅了する。古代エジプトの芸術家たちは、自分がとらえた現実を自由に表現したのではなく、描かれたものを永遠に「生かす」という目標のために作品を制作した。記号が保持する永遠の力に対する彼らの強い信念をわたしは共有している。

(翻訳・相島葉月)



イザベラ・ウフマン《恐怖》2020年 © Izabela Uchman
ギリシャ神話の天空をかつぐアトラス。「恐れは死を防がず、生を妨げる」(ナギーブ・マフフーズ)



イザベラ・ウフマン《信仰の樹木》2019年 © Izabela Uchman
「違った宗教は同じ庭に咲く美しい花であり、同じ大木の枝にすぎない」(マハトマ・ガンディー)



イザベラ・ウフマン《美》2019年 © Izabela Uchman
古代エジプトの蓮とパピルス。「神は美しく、美しいものを愛する」(預言者ムハンマドの言行録ハディース)



イザベラ・ウフマン《自由》2022年 © Izabela Uchman
古代エジプトのペンヌの形をしたアラビア語の自由。太陽のように再生を繰り返す荘厳なアオサギである

あいま はつき
相島 葉月 民博グローバル現象研究部

古代エジプト文明と現代エジプト人

わたしと思う「エジプトの基本情報」（地理的な位置や言語、宗教など）はさておき、エジプトと聞けば大体の人がピラミッドとスフィンクスを連想する。一九世紀に写真や印刷技術が世界中に広まって以来、砂漠に並ぶ巨大な三角山とライオン像は、グローバルな意味でエジプトの象徴的な風景となった。わたしも一九九八年に初めてエジプトを訪れた際には、ピラミッドとスフィンクスの前で写真を撮ったように記憶している。古代エジプト文明ではなく、アラビア語やイスラームについて学ぶための滞在であったにもかかわらず、ピラミッド観光を回避することはできなかった。

二〇〇六年から二年半、再びカイロに滞在した。中流層ムスリムの友達が增えるに従い、彼らが古代エジプト文明や遺跡を自分たちの文化遺産とは感じていないことを知った。ギザのピラミッドはカイロの郊外にあるが、カイロに住んでいる人が学校の遠足以外で訪れることはない。ピラミッドやミイラを見たがるのは、大型バスに乗った外国人観光客くらいであるという認識が主流であった。古代エジプト文明だけでなく、イ

スラームの文化遺産への関心も薄かった。カイロには下町に残るイスラーム建築を修復して「歴史的な街並み」を保全した地区があるが、エジプト人中流層はまったく足を踏み入れたことがないと言っていた。

中流層ムスリムにとって、文化はモダニティと直結している。スポーツクラブやショッピングモール、カフェといった空間こそが近代の象徴であり、文化的な活動をおこなう場所なのである。外国人を魅了するイスラーム建築や古代エジプト美術は、近代化を渴望する中流層にとっては、どうしようもない過去の遺物なのだ。

「アラブの春」の置き土産

近年、中流層ムスリムの文化遺産との関係性に変化が見られる。二〇一一年一月二五日に始まったムバラク大統領の辞任を求めるデモが世界中で報道された。エジプトにも「アラブの春」が訪れたのだ。外国人ジャーナリストと研究者がエジプトに殺到したが、政情不安により観光客は激減した。新型コロナウイルスの世界的な流行もあり、エジプトに外国人観光客が戻る気配はない。一方で、断食月ラマダンの晩に、カイロの下町にある「歴史的な街並み」に出かけ、イスラーム建築を背景にした写真をSNSで見かけるようになった。外国人が去って閑散とした観光地に、エジプト人中流層が訪れるようになったのである。中流層が抱くインスタグラムやフェイスブックに映える写真を投稿したいという



エジプト人空手家シェリーフ・アブデルナビーのフェイスブックに投稿された一枚。古代エジプトの遺跡で得意の技を極めて記念撮影(エジプト、ルクソール、2016年、提供:シェリーフ・アブデルナビー)

欲求が、過去の遺物だった風景を、魅力的な遺産に変えたのだ。

二〇一三年に参加したエジプト伝統空手道協会が主催した国際空手講習会のバナーに、ピラミッドとスフィンクスがデザインされているのに驚いた。海外の空手家に「エジプトらしさ」を端的に伝えるに当たり、グローバルな文化的象徴であるピラミッドは、使い勝手が良かったのだろう。スフィンクスで、空手の強さを表現したのかも知れない。二〇一七年に同協会が世界伝統空手道選手権をカイロで開催した際には、ピラミッドで海外から来た空手家をもてなした。フェイスブックに次々とアップロードされる集合写真

や、砂漠で形の演武をする動画から、エジプト人が海外からの来訪者との交流を大いに楽しんでいる様子が伝わってきた。ピラミッドを自分たちの文化遺産とする認識が芽生えたようだ。

新しい国民文化

二〇二二年一月に、二・七キロにわたるルクソールのスフィンクス参道の復元を記念した式典にシーシー大統領が出席する様子が、国内外メディアに報道された。二〇一三年に失脚したムルシー大統領がムスリム同胞団の出身であったことから、イスラームの理念を政策の基盤とする政治的イスラームに嫌悪感を抱く人が増加した。



世界最古の大学、アズハルモスクの外壁。2018年に終えた修復事業によりアラベスク文様が蘇った(エジプト、カイロ、2018年)



アズハルモスクの中庭。インスタ映えスポットとして大人気である(エジプト、カイロ、2018年)



エジプト伝統空手道協会主催の国際空手講習会のバナー(エジプト、カイロ、2013年)



全国選手権のポスター(2022年、エジプト伝統空手道協会フェイスブックから)



妹のピラミッド観光につきあう筆者(撮影:相島香理、エジプト、ギザ、2006年)

シーシー政権が発足してからも、イスラームへの根強い不信感が残る。一九五〇年代のアラブ民族主義、一九七〇年代に始まったイスラーム復興に続き、今度は古代エジプト文明にエジプトの国民文化をまとめる役割が期待されている。

災いと闘う守護者

菅瀬 晶子
民博超域フィールド科学研究部



A 聖ゲオルギオスのイコン (エジプト、H0168692)

コ罗纳禍の初期のころ、アマビエなる妖怪が突如もてはやされたのを記憶だろうか。なんでもむかし、疫病が流行した折に、海中から突然姿をあらわし「わが姿を描いて広めよ」と告げたとか告げなかったとか。この伝承に飛びついた人びとによって、日本中に「疫病退散」などと銘打たれたアマビエグッズが溢れ、神社仏閣ですらアマビエにあやかっただけで御朱印らしきものやらを売りはじめた。ところが案の定、それしきりでコ罗纳禍はおさまるはずもなく、いつしかアマビエの姿も見かけなくなっていた。

魚とも鳥ともつかぬアマビエを最初に見たとき、正直わたしは頼りないな、と思った。病をはじめとした災厄を撃退してくれる存在ならば、やはり勇ましくあつてほしいというのが人情である。例えば、歴史的パレスチナを含む東地中海地域で、宗教・教派の別をこえて崇敬される聖ゲオルギオス。竜を退治する騎士の姿でイコンに描かれる彼は、まさに災いと闘う守護者である。



西アジア展示
「信仰」

本館展示場

観覧券売場

南アジア展示
「宗教文化 — 伝統と多様性」



キリスト教徒の家屋の入り口に飾られた、巨大な聖ゲオルギオス像。ほぼ等身大の大きさ (ヨルダン川西岸地区、2016年)

B ドゥルガー女神 (インド、H0173556)

Hからはじまる番号は本館の標本資料番号です。

家を守る聖ゲオルギオス

一三世紀イタリアの年代記作者、ヤコブス・デ・ウオラギネの聖人列伝『黄金伝説』によれば、聖ゲオルギオスはカッパドキア出身のローマの兵士で、四世紀初頭にパレスチナのデイオスポリス、現在のイスラエルのリツダ(ヘブライ語名ロッド)で殉教したとされる。リツダ旧市街には、彼の墓の上に建てられたギリシア正教の聖ゲオルギオス教会が今もひっそりと残っており、一月一六日にここでおこなわれる聖ゲオルギオス殉教祭には、パレスチナ中から巡礼者が詰めかける。地下の墓所へ至る階段には長蛇の列ができ、キリスト教徒のみならず、ムスリムも聖人の墓にぬかずき、願をかける。聖ゲオルギオスは雨を降らせて豊穡をもたらし、あらゆる病を癒やす守護者だと信じられているためだ。



リツダでおこなわれる聖ゲオルギオス殉教祭で、聖人の墓に詣る人びと。オリーブオイルを願かけに用いている(イスラエル、1997年)

にイコンに描かれる聖ディミトリオス、「背教者」ユリアヌス帝を罰したという伝説に彩られ、「コプト正教では『双剣者(アブ・セイフ・エイン)』と讃えられる聖メルクリオスなどが有名だ。いずれも紅顔の美少年、あるいは美丈夫として描かれるのが常である。美もまた力の象徴なのだ。

美しき闘う守護者といえば、南アジア展示におわす女神ドゥルガーを忘れてはならない。優雅に黒髪をなびかせ、ほほえみすらたたえて足下の敵神アスラに槍を突き立てる彼女は、インド神話最強の戦神にして、シヴァ神の後パールヴァティーの化身とされる。毎年九月下旬から一〇月初旬、インドではベンガル地方を中心に、彼女を讃えるドゥルガー・プージャヤーが盛大に祝われる。美々しく飾られた女神像は、最後は川に流されてしまうのだが、本来はヒマラヤの山の神パールヴァティーの化身である彼女を、山に帰すという意味があるという。ドゥルガー・プージャヤーの様子は、インド映画「女神は二度微笑む」で、重要な伏線として幻想的に描かれている。興味のある方はぜひご覧になってほしい。



美もまた力

キリスト教において、戦士の聖人は災厄からの守護者として、高い人気を誇る。東地中海では、ゲオルギオスとしばしば同時

する。ベツレヘム一帯もそのひとつで、郊外には聖人の母親の出身地と伝わる村もある。宗教をこえた人気を誇るのは、つまり彼が地元の英雄であるからにほかならない。東地中海アラビア語圏のほかの地域のキリスト教徒にも見られる風習だが、このあたりのキリスト教徒の家屋の多くには、入り口に魔除けとして聖ゲオルギオスのレリーフが飾られている。

学生時代の友人の親族がこのレリーフの工房をやっているというので、見学に連れていってもらったことがある。ほとんどアタリもつけず、いきなり電動ドリルで石材に彫刻する離れ業に驚いたものだが、定型のあるイコンを模倣して量産するからこそ可能なのだろう。ちなみにその石工の名前は、ジョルジュであった。統計をとったことはないが、歴史的パレスチナのキリスト教徒の五人に一人は、ジョルジュまたはジュリエス、ジョルジェーロという、ゲオルギオス由来の名前なのではないだろうか。

みんなく インフォメーション

重要なお知らせ

新型コロナウイルス感染症の状況によっては、催し物の予定を変更・中止する場合があります。事前に本館ホームページでご確認ください。

イベント予約はこちら

みんなくホームページ
催し物のご案内

<https://www.minpaku.ac.jp/event>



特別展

「Homologous」の「なま」 ——「なま」の不思議を科学する——

会期 11月23日(水・祝)まで
会場 特別展示館

◆関連イベント

連続講座 **SpringX** 超学校
みんなく×ナレッジキャピタル

「トバコつぎあつ」シリーズ いついかなる角度からみた「トバコ」研究を 紹介します。

第4回
英語学習の脳科学編

日時 11月4日(金)19時～20時

講師 尾島司郎(横浜国立大学教授)

参加形式
ナレッジキャピタルYouTuberアカウン

トよりオンライン(ライブ配信)で視聴

※申込不要 参加無料

※アーカイブ配信あり
※詳細は本館ホームページをご覧ください。

主催 一般社団法人ナレッジキャピタル
国立民族学博物館

ワークショップ

「本の世界からの脱出」

日時 11月12日(土)

会場 本館第5セミナー室ほか

対象 小学生以上(小学2年生以下
は保護者または高校生以上の
同伴者と参加)

定員 各回20名

※脱出ゲームのレベルと内容は小学校
高学年程度を対象としています。

※事前申込制(先着順)、参加無料

※お申込みは「ちの」
(大阪大谷大学

<https://forms.gle/2StevJ4ekLGDHob8>)

主催 国立民族学博物館

大阪大谷大学文学部日本語日
本文学科 杉本ゼミ

ワークショップ&ワークショップ展示 「レゴブロックを使ったプロダク



ラミングワークショップ体験 展示——プログラミング体験から 「ことばの伝え方を学ぼう！」

日時 11月6日(日)

会場 本館第5セミナー室

※事前予約は下記サイ
トから(前日まで)

※当日参加は13時から
会場前で受付

※参加無料

企画・実施
国立民族学博物館
佐野睦夫(大阪工業大学 特任教授)
大井翔(大阪工業大学 特任講師)
上田信行(同志社女子大学 名誉教
授、大阪工業大学 客員教
授)

吉永紀子(同志社女子大学 准教授)
同志社女子大学現代社会学部 現代
こども学科 吉永ゼミ



企画展

「海のくらしアート展——モノ からみる東南アジアとオセアニア」

会期 12月13日(火)まで

会場 本館企画展示場

研究公演

「口承文芸から現代詩、そして ヒップホップへ」

——モンゴルの韻踏み文化——

モンゴルの韻踏み文化は、遊牧民の口
承文芸に始まり、現代詩やヒップホッ
プの歌詞へと受け継がれています。本
公演では、モンゴルの詩の朗読家やラッ
パーを招聘することで、韻踏み文化の
伝統と変容を考察していきます。

日時 11月26日(土)13時30分～15時
50分(13時開場)

出演 D・ソルバラム(俳優、朗読家)
デサント(ラッパー)

ジエニー(ラッパー)

司会・解説 島村一平(本館 准教授)

みんなくゼミナール

会場 みんなくインテリジェントホール(講堂)
※定員200名
※事前申込制(先着順)、参加無料
・当日参加受付あり(定員40名)

第527回

11月19日(土)13時30分～15時(13時開場) 身の回りをフィールド言語学する

講師 吉岡乾(本館 准教授)

【申込期間】

■一般受付

11月16日(水)まで
※友の会先行受付は終了しました。

第528回

12月17日(土)13時30分～15時(13時開場) 神殿をつくることから生まれた文明 ——古代アンデスの祭祀建造物

講師 松本雄一(本館 准教授)

古代アンデス文明の展開のなかで、神殿を
建造することは極めて重要な意味を持って
いました。人びとはなぜ3000年もの間、繰り返
し神殿を作り続けたのか、神殿が文明の形
成に果たした役割を探ります。

【申込期間】

■友の会先行予約

11月14日(月)～18日(金)、定員40名

【申込先】

国立民族学博物館友の会(千里文化財団)

■一般受付 11月21日(月)～12月14日(水)



ペルー北高地、チャビン・デ・ワンタル神殿
(撮影：ジェイソン・ネスビット、2018年)

みんなくウィークエンド・ サロン——研究者と話そう

会場 本館第5セミナー室(定員42名)
※申込不要(当日先着順)、参加無料(要展
示観覧券)、14時から整理券配布
※各回、開始30分前に開場

11月13日(日)14時30分～15時15分

新古・エジプトの考古学博物館

話者 末森薫(本館 准教授)

11月20日(日)14時30分～15時

脳波で言語理解の脳内処理を探る

話者 井原綾(国立研究開発法人情報通信
研究機構 主任研究員)
吉岡乾(本館 准教授)

11月27日(日)14時30分～15時

オセアニア展示からみる 人類の海洋世界の進出

話者 丹羽典生(本館 教授)

刊行物紹介

■石原和、菊澤律子 編
『手話が「発音」できなくなる時
——言語機能障害からみる話者と社会』
ひつじ書房 1,870円(税込)



「手話は言語である」といわれるようにな
って久しい。では、手話が「話せなく」な
ると、どうなるのか？本書では、交通事
故で手話が部分的に「発音」できなくな
った例をとりあげ、話者の立場、言語学、
法律の観点から手話と社会を考える。

■木村淳、小野林太郎 編著
『図説 世界の水中遺跡
——水底に眠る「時の証人」を求めて』
グラフィック社 2,750円(税込)



本書は日本の重要な水中遺跡を含む、世
界の主な水中遺跡を豊富なフルカラーの
写真とイラストにより解説・紹介するも
のである。時代的にも古代から第二次世
界大戦期まで、地域的にも地中海、アジ
ア、アメリカ大陸まで広くカバーした。

お問い合わせ

国立民族学博物館 広報・IR係

電話 06-6878-8560 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6875-0401

お問い合わせフォーム <https://www.minpaku.ac.jp/information/contactus/form>



友の会

お申込みは友の会ホームページ内の受付
フォームをご利用ください。

友の会講演会

参加形式

①本館第5セミナー室(定員96名)

②オンライン

会員：無料、一般：500円(会場参加のみ)

※オンライン聴講ならびに会員以外の方の
ご参加には事前申込が必要です。

第530回 11月5日(土)13時30分～15時

【企画展「海のくらしアート展——モノからみる 東南アジアとオセアニア」関連】

カヌーとくらし

——海に生きるオセアニアの人びと

講師 須藤健一(堺市博物館 館長、本館
名誉教授)

オセアニアの島じまにくらす人びとは、わた

したちと同じアジア系の人類集団です。「太
陽の出る東方に生命の源と新しい島がある」
と信じて大海原を航海したといわれています。
その大航海の足は大型のダブル・カヌー。
今でも、島じまの往来や魚とりにカヌーは必
需品です。カヌーをつくり、海を生活の場
にしてきた島人の生き方を考えてみましょう。

第531回 12月3日(土)13時30分～15時

分断された商世界をつなぐ 「ローカル・インフルエンサー」 ——タンザニアにおける商人のソーシャル メディアの利用とビジネスの未来

講師 小川ざやか(立命館大学 教授)

タンザニアでは、インスタグラムなどのSNS
を利用した商売が活性化しています。本講
演では、商人たちがSNSを利用した商売を
通じて、客筋やフォロワーといった自身の「系
譜」をいかに築いていくか、そして同時に、
各商人の「系譜」ごとに分断された商世界を

いかにつなぎ合わせていくかをお話します。
そこから競争的なビジネスとなんだか息苦
しいSNS社会を楽しむヒントを考えます。

オンラインサロン

中牧理事長のオンラインサロン

日時 11月12日(土)13時30分～14時30分

※会員限定の無料のオンラインイベントです。

体験セミナー

第83回

旅する獅子——伊勢大神楽 総舞見学

講師 神野知恵(人間文化研究機構 人文知
コミュニケーション、本館 特任助教)

現地訪問 12月24日(土)

※映像・レクチャー・現地訪問の3本立て企
画です。詳細はホームページをご確認
ください。

【申込期間】11月15日(火)まで

刊行物紹介

■吉田憲司 編集代表、国立民族学博物館 特別協力
『世界の仮面文化事典』
丸善出版 19,800円(税込)



本事典は、世界各地の仮面と、仮面を取り
巻く文化を広く見渡し、その多様性
と普遍性を浮かび上がらせる。仮面に
ついての総論を第1部とし、第2部では
地域別に概説と項目別の仮面について
の民族誌的解説を付す。

主催 渋谷区立松濤美術館
国立民族学博物館
公益財団法人千里文化財団

休館日 月曜日(ただし1月9日は除
く)、11月24日(木)、12月29
日(木)～1月3日(火)、1
月10日(火)

会期 11月15日(火)～
2023年1月15日(日)

会場 渋谷区立松濤美術館
開場時間 午前10時～午後6時
(入館は閉館時刻の30分前
まで、毎週金曜日は夜8
時まで開館)

巡回展 国立民族学博物館コレクション 「ビーズ——つなぐかざりみせる」

中央・北アジア展示リニューアル

狩猟の映像と毛皮などを新たに展示
し、ロシアの寒冷地で暮らす人々の
生活を紹介します。「シベリア極北」
セクションにぜひ足をのぞいてください。

南米熱帯サバンナ 二泊三日の旅

齋藤晃
民博 人類文明誌研究部



熱帯の平原を旅してみました

一九九〇年代中葉、わたしは南米ボリビアの熱帯低地で一年半ほどフィールドワークをおこなった。文化人類学の文献で「モホ」、「モヘーニヨ」などと称される人びとが対象である。そのとき、モホ

ス平原というサバンナを、ときには河川沿いにカヌーで、ときには草原経由で馬に乗って、幾度も横断した。ここでは、それらの旅のうち、とりわけ過酷だった旅の思い出を綴りたい。



トリニダットの中央広場(上)と子どもたち(下)
(1995年)

出だしのハプニング

一九九五年八月初め、わたしは平原南部のトリニダットというフィールドワークの拠点はサン・ロレンソという町だったが、平原南部にはその町の出身者が移住して造った集落が点在しており、彼らの信仰や伝承を調べるため、わたしはトリニダットでひと月半ほどすごした。しかし、八月二〇日はサン・ロレンソの守護聖人であるローマのラウレンティウスの記念日であり、盛大な祭礼が催されるため、わたしはその日までに町に戻る予定だった。

当初の計画では、八月七日に馬でセクレ川まで北上し、そこから船外機付カヌーでプエルト・サン・ロレンソという村まで行き、翌八日、祭礼に参加するためサン・ロレンソに向かう人びとの



空から見た乾季のモホス平原(1997年)

民自治組織の船外機付カヌーにひろってもらい、夜八時ごろ、プエルト・サン・ロレンソに到着した。

湖沼を進む

翌九日、祭礼の参加者はすでに出立してしまつたため、別途、馬と案内人を調達する必要があった。片道一時間かけて近くの牧場に赴いたが、馬は予防接種を打ったばかりで使えないとのこと。やむをえず、馬が調達できるという希望的観測のもと、三時間ほど歩いてサン・ルイスという集落に移動した。

しかし、道のりは最悪だった。雨季のあいだモホス平原は水没するが、乾季には水が引く。しかし、ところどころに湖沼が残り、そこに葦が生育する。サン・ルイスに向かう途中、そうした湖沼を何度も突っ切らねばならなかった。水深は膝か、ところによっては腰まであり、視界は葦で完全に遮られている。人が分け入った跡があるので、それに沿って進むが、一度迷子になると、抜け出すのはむずかしい。鋭利な葉に手足を切られ、アリにかまれ、散々な目にあつた。

サン・ルイスには夕方到着したが、村人の多くはサン・ロレンソに出立済みだった。しかし、さいわい、報酬を約束して馬と案内人を調達できた。せっかくだから、祭日のミサに間に合うよう、当日夜に出立しよう、という話になった。村人に屠(ほぶ)ったばかりの牛の肉(たいへんな御馳走!)を振る舞われ、仮眠をとつたあと、午前二時くらいに出発した。さいわい、月が出ており、移動に支障はない。何度か湖沼を横断したが、馬に



雨季の終わりのモホス平原
(1995年)

牛車に便乗する、という算段だった。しかし、この計画は出だしでつまづいた。出発前日、馬の調達と道案内を依頼していた村人が、夕方から飲酒を始めたのである。翌日の予定をリマインドしたが、大丈夫、大丈夫、と呂律あやしく繰り返すのみ。結局、深酒したため、出発が一日遅れてしまった。

八日早朝、しらふに戻った村人とも乗っているの、膝下がぬれる程度である。東の空が白んできると、草原全体に絹のように真つ白な霧が立ちこめていることに気づいた。やがて日が差すと、まるで雲の上のような光景が広がっており、感動で体が震えた。

サン・ロレンソには午前八時ごろ到着した。ちょうど、ミサの開始を告げる聖堂の鐘の音が町中に鳴り響いていた。思い返せば、旅のあいだ、多くの人に助けられた。初対面の異邦人に援助を惜しまないモホス平原の人びとの包容力と寛容さには、ほんとうに頭が下がる。



サン・ロレンソの守護聖人祭(1995年)

日系企業バンノーの足跡

にわのりお
丹羽 典生 民博 グローバル現象研究部



ラウトカのバンノー事務所(2002年)

京都大学学術調査隊写真コレクション

写真資料件数：館内公開42,195件(内インターネット公開22,361件)
京都大学学術調査隊のうち、本館初代館長梅棹忠夫、第3代館長石毛直道が特に深く関わった調査隊の写真資料の一部。本稿で扱った「トンガ王国調査隊」は、石毛直道も参加していた京都大学探検部によって1960年6月から11月におこなわれたもの。
<https://htq.minpaku.ac.jp/pkuse/>



1960年に撮影された
ラウトカのバンノー事務所
(撮影：飯田博、X0257821)



バンノーの貨物船。
煙突と船体にバンノーの名前が見える
(撮影：岡田敏、1960年、X0259189)

オセアニアへ長年足を運んでいると、遠い戦前からの関係を受け継いだ日本人の足跡を見つけることがある。歴史に詳しい方なら当然と思われるかもしれない。戦前の日本は国際連盟の委任統治領としてミクロネシアをもっていたし、それ以外にもソロモン諸島やバプアニューギニアが戦場となっているからだ。ところが戦前の日本と太平洋とのかかわりは、それらに限られない。移民としてオセアニアに雄飛した日本人

がいたのである。なかでもひととき存在感を放っていたのが、バンノー(伴野)が設立した会社であった。メラネシアのフィジーでフィールド調査をしていたわたしにとって、「バンノー」は常に気になる存在であった。作家の北杜夫の太平洋航海記に顔を出していたし、トンガの歴史書には、ヨーロッパの商社と競り合う日本人経営の企業バンノー・ブラザーズとして登場している。ポ

リネシアのトンガはフィジーの隣国で、バンノーの本店がおかれていたのだ。お世話になっていた年配の方から、むかしは日本人を見ればバンノーと声をかけたもんだと言われたこともある。ところが、実際の彼らの活動となると今は雲をつかむような状態である。

独立前のオセアニア

そうしたわたしの要求を満たしてくれるのが、

国立民族学博物館のデータベース「京都大学学術調査隊写真コレクション」の「京都大学探検部トンガ王国調査隊」のコレクションである。名称こそトンガ王国への探検であるが、ラバウル(バプアニューギニア)、エスピリトゥサント島(バヌアツ)、ビティレブ島(フィジー)に訪問した記録が残っている(地名の表記はコレクションに準じている)。オセアニアにおける最初の独立は西サモアの一九六二年であったことを考えると、彼らの訪問した一九六〇年はまだオセアニアにおける植民地時代の景観にあたるわけだ。

撮影されたものである。撮影地が不明ながらバンノーの貨物船の姿を確認できる。また首都のオフィスで開かれた一連の宴会の写真もある。さらに、同じ本島でも西部の都市ラウトカ近郊の写真がある。いちばんわかりやすいのは「伴野商会事務所」という写真であろう。その他にもこの事務所周りに位置するサトウキビ会社や港、あるいはそれらの近所を散策しているバンノー関係者の写真を見ることが出来る。

六〇年前に思いをはせる

ラウトカにあるバンノー事務所は、じつはわたしが二〇〇〇年代前半に住み込み調査していた村落の近場である。この事務所がある場所から海に向かって三〇分ほどナ



ラウトカ近郊の筆者の調査村(2009年)

名前ぐらいしか知らないということであった。ただし日本人であるわたしからの問い合わせに対して、その方も小耳に挟んだという戦前のバンノーの活躍ぶりを嬉しそうに説明してくれた。

じつは写真の場所はラウトカでも都市のはずれに近い場所である。植民地時代の独占企業として政府以上の力を振るっていた製糖会社の工場の裏手にあたる。そうした立地であるため砂糖を精製する際に生じた甘い匂いがあたり一面に充満していた。ホームステイ先とは別の村落に遠出した後、バスに揺られて帰宅する途上にこの砂糖の匂いをかぐと帰ったという実感が湧き、ほっと心地ついたものであった。

思うにこれらの写真が撮られたころは、製糖会社も莫大な利益を上げバンノーも健在であった。写真で切り取られた過去の方が生き生きしているというのは、なんとも不思議な気分である。



上：ラウトカのサトウキビ畑(2001年)
下：フィジーのサトウキビ畑(撮影：飯田博、1960年、X0256841)



バンノーに関する写真を目には見ることが出来るのは、フィジーの滞在期間にあたる。いずれも本島で

ラウトカにあるバンノー事務所は、じつはわたしが二〇〇〇年代前半に住み込み調査していた村落の近場である。この事務所がある場所から海に向かって三〇分ほどナ

ンデイ方面に歩くと海岸沿いの区画がある。そこにはソロモン系移民の集落があり、わたしは聞き取りのために通っていたのだ。事務所を見つけたのはたまたまで、バンノー関係の建物があることに衝撃を受けたことを覚えている。

バンノーの建物には、先住系フィジー人の方が住んでいた。突然の訪問であったにもかかわらず、当方の質問にも快く返答してくれた。住み込み人は、管理を任されているだけで、バンノーについては

笑いとして描かれる戦争

黒田賢治 民博グローバル現象研究部

成功を収めた戦争コメディ映画

実際にあった戦争を題材にして笑いの要素を散りばめたコメディ映画というと、不謹慎に感じるのではないだろうか。膨大な数の人間が死を遂げた戦争を題材にしている以上、厳かに描かねば死者への冒瀆であるようにも思えてしまう。ところが二〇〇〇年代以降のイランでは、「聖地防衛」とよばれるイラン・イラク戦争（一九八〇～八八年）を題材に、コメディ映画が盛んに作成されるようになった。なかでも、「はみ出し者たち」は第三作まで続編が製作され、興行的にも成功を収めた戦争コメディ映画の代表的な作品である。

第一作「はみ出し者たち」（二〇〇七年公開）は、主人公マジードが密かに心を寄せる女性ナルゲスに言い寄った若者にマジードが危害を加えて投獄されるところから始まる。マジードは、スズキのバイクを乗り回し、マジード・スズキの通

り名をもつ典型的なテヘランの下町の無頼漢である。彼は出所の際、弟分と凶つてイスラーム教徒の義務であるメッカ巡礼を果たしてきたと偽り、大手を振って戻ってくる。それもこれも敬虔な家庭に生まれ育ったナルゲスの気を引き、彼女の父親にも認められるためだった。しかし徐々に嘘があらわになり、アヘン中毒の獄中仲間の登場で完全に計画は破綻してしまふ。窮地に陥ったマジードはナルゲスとの結婚を彼女の父親に許してもらうため、大逆転を図ろうとイラン・イラク戦争という「聖地防衛」の英雄になろうと仲間たちと志願するのだ。

マジードたちは、前線に向かう志願兵たちのなかでもはみ出し者である。訓練も真面目に受けない彼らに対して、他の指導員たちからは厳しい眼を向けられるものの、直属の指導員や随行者の聖職者には温かい目で見守られ、部隊の仲間たちとも徐々に打ち解けていく。ところが急な戦闘に巻き込まれ、前線の真つただなかに突入していき、部隊の仲間たちも失っていく。映画の終盤、地雷原でイラク軍からの砲撃を受け部隊が立ち往生するなか、意を決したマジードが一人ものともせずにつき進んだことで、部隊は死地を脱することができた。しかし戦闘は続く。そしてイラク軍による野戦病院へ

の攻撃に立ち向かうなか、マジードは銃撃を受け戦死し、物語は終わる。

変容する聖地防衛映画

監督のマスウード・デフナマキーはドキュメンタリー映画を二本制作していたが、フィクション映画は本作が初の監督作品であった。そのためもあって終盤で急激に物語が展開したように、作品として十分な出来であるとはいえず、とても人気を博したとは信じがたい。加えて、聖地防衛の従軍者たちをコミカルに描いたことについて批判が少なかったというのも驚きである。しかし、まさにこうした表現によって、本作は新しいタイプの「聖地防衛」を演出することに成功しているのだ。

特別な経験をした者とそうでない者として描きわけけることで、従軍経験の意味を微妙にずらしているのだ。

「聖地防衛映画」とよばれるイラン・イラク戦争を題材とした映画ジャンルでは、主人公の兵士は一九八〇年代では英雄として、一九九〇年代では人間的な存在として描くように変化してきたが、ほとんどがシリアスな作品であった。コメディ作品も一九九〇年代半ばに作られたが、本格化するのは圧倒的に二〇〇〇年代半ば以降であり、本作も含めいくつかの聖地防衛映画が国内の映画祭で賞をとった。ちょうどそれはイランの体制派によるイデオロギー的なメディア戦略が変化していく時期でもある。

戦争と笑いとは似合わない組み合わせだが、その組み合わせの効果の大きさを「はみ出し者たち」は教えてくれる。戦争に面白さがあらわれることは、やはり笑えないことなのだ。



建設中の聖地防衛博物館(エスファハーン、2019年)



戦没者などの墓標 (エスファハーン、2019年)

デフナマキー監督はイラン・イラク戦争への従軍経験があるだけでなく、戦後もラディカルな体制翼賛グループにも加わっていた。つまり本作は、戦争をめぐる体制派の立場から描いたプロパガンダ作品なのである。特に無頼漢である主人公の道徳性が従軍を通じて変容していく様子を描いたことは、「正しい」戦争に参加することの意味を、戦争の記憶がない世代に伝える政治的重要性をもっていた。加えて、戦後に政治的志向によって分裂していく従軍経験者たちを、戦場で



街中に建てられた戦没者のモニュメント (テヘラン、2018年)

伊勢大神楽の符牒

かみの ちえ
神野 知恵

人間文化研究機構 人文知コミュニケーター
民博 特任助教

世界中で多くの言語が消滅の危機に瀕しているが、特殊な職能集団によって使われる「符牒」（隠語）もまた、希少な言語活動のひとつであるといえよう。

わたしは、伊勢大神楽について研究している。彼らは今でも西日本各地で獅子舞による悪魔祓いをおこなうことを生業としている。家々を訪ねて獅子舞を奉納する現場に初めて同行したとき、多様な符牒が使われていることに震えるほど感動したのを覚えている。家々を廻るときには、まず「初穂取り」とよばれる番頭役が玄関に入り、家の主人から金一封や米などの初穂を受け取る。その初穂料を後からやってきた神楽師たちに伝えることで、その金額に見合った長さの舞が奉納される。このとき「この家は千円分」「隣の家は一万円で、獅子二頭で長く舞おう」などと言うと相手に失礼になるので、「ブザエモン」「ヒラカタ」「ヌッカケ」などという、金額や舞の種類をあらわす符牒が使われる。かつて、俳優の小沢昭一氏も伊勢大神楽に同行し、初穂の米をもらって歩く荷持ち役を体験したという。初穂取りが「ジゾウサン！」と言うと、この家では米は「ない」からお前はついて来なくてよいということだと途中から理解できるようになったというエピソードが残されている。実際には、行った家で喪中などのために悪魔祓い自体が「ない」場合にも「ジゾウサン」と言うので、わたしは長いあいだ「喪中」という意味だと勘違いしていたが、小沢氏のエピソードを読んでその誤解に気づいたのだった。そのほかにも「去年

はこの家でお茶をいただいたが、今年はおばあさんがいないからなしだそうだ」「先を急ぐから早く行こう」「トイレに行ってくる（大小の区別アリ）」など、家の人に聞かれると少々具合の悪い状況で符牒が用いられることが多い。また、食べ物やモノの名前は、なぜか地名や人名のような響きのことばが多い。旅先で出会った土地や人にちなんだ名前なのかもしれないと考えたら非常に興味深いのが、謎だらけである。符牒を交えた神楽師たちの会話はどこか世間離れた粋な雰囲気があり、それによって一体感を得ているように見えることもある。そんなときわたしは彼らに「今のはどういう意味ですか」「このことは何と言いますか」と聞かないようにしている。そう聞くことが野暮に感じるからだ。できるだけ用法から意味を推測し、わかっている自分では使わないようにしている。

伊勢大神楽とよく比較される韓国の放浪芸能集団「男寺堂」の研究書には、符牒がしっかりと書き残されている。日本でも、香具師や山窩などの特殊な集団で用いられる符牒についての論者が見られる。わたしは伊勢大神楽の符牒についても必ず記録しておかねばならないと考えている。一方で彼らが活動を続けている限り、符牒は符牒としての機能を保たねばならず、その意味や用法は公開されてはならないとも思っている。伊勢大神楽の符牒についての論文を発表する日が来ないことを願いつつ、ひそかに覚え書きを貯めておくほかはないだろう。

『月刊みんぱく』は 国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読が可能です。また、友の会会員の方には毎月お届けします。

国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するために作られました。本誌購読のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会(千里文化財団)までお問い合わせください。

電話 06-6877-8893 (平日9:00~17:00)

https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/

月刊みんぱく 2022年11月号

第46巻第11号通巻第542号 2022年11月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発行人 園田直子

編集委員 三島禎子(編集長) 池谷和信 上羽陽子

岡田恵美 中川理 吉岡乾

制作・協力 公益財団法人 千里文化財団

印刷 能登印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報・IR係をお願いします。

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

この雑誌は、環境に配慮した工場で、再生産可能な大豆由来のインク、FSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。



月刊みんぱく

2022年

11月号

編集後記

エドワード・W. サイドが『オリエンタリズム』を発表してから半世紀近くが過ぎようとしている。端的に言えば、西欧から区別されるオリエント(東方)を特殊なまなざしでとらえようとしたヨーロッパの思考様式を批判したものである。今号の特集では、エジプトをめぐる内外のイメージのギャップ、あるいはその変化が多角的に紹介され、まさに「オリエンタリズム」をめぐる相克の状況を知ることができた。

ところで、エジプトといえば遺跡を思い浮かべずにはいられないが、遺跡が「発掘」されることに疑問をもつ人は多いと思う。つまりなぜ遺跡は埋まっているのかである。土砂や塵の堆積などの自然要因や、植物や微生物による土壌形成、あるいは人間が新しい建物を建てるといった人為的要因などで説明されることが多いが、どれもしっくりとこない。しかしかの有名なチャールズ・ダーウィンのミミズの研究には納得するものがある。なんとミミズは一年に厚さ0.2インチ(およそ0.5センチメートル)の土を地中から運びあげるといふ。地表のものは、1000年で5メートル埋没する計算である。エジプトのミミズについて知りたいのはわたしだけだろうか。(三島禎子)

2022年10月号「編集後記」の内容に誤りがありました。

下記のとおり訂正いたします。

P21 「編集後記」5行目

誤) 柳宗悦

正) 柳宗悦

次号の予告 12月号

特集「いわと人」(仮)

国立民族学博物館 National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1 電話 06-6876-2151

開館時間 10:00~17:00(入館は16:30まで)

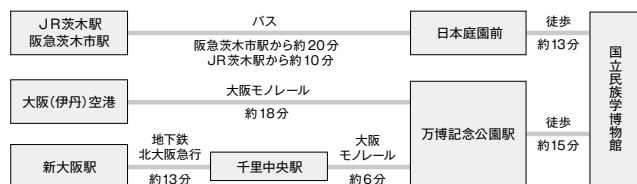
休日 毎週水曜日(水曜日が祝日の場合は翌日が休館日)

年末年始(12月28日~1月4日)



主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段は次の方法が便利です。



みんぱくホームページ

<https://www.minpaku.ac.jp/>



国立民族学博物館ミュージアム・ショップ

特別展関連グッズのご案内

オリジナル T シャツ 〈全2種〉

国立民族学博物館では、特別展
「*Homō loquēns* 『しゃべるヒト』
——ことばの不思議を科学する」を
開催しています。

展示関連のオリジナル T シャツは、
いずれも「ことば」に関するデザインで、
ミュージアム・ショップにて好評発売中です。



右：スピーチチェーン T シャツ
カラー：黒

左：手話 (1～10) T シャツ
カラー：デニム

価格：2,700 円 (税込) 綿 100%
サイズ：S、M、L、XL

お問い合わせ

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ E-mail shop@senri-f.or.jp 10:00～17:00 水曜日定休
オンラインショップ「World Wide Bazaar」 <https://www.senri-f.or.jp/shop/>



オンラインショップ